opusdei.org

聖アウグスティヌス に学ぶ罪からの解放

聖アウグスティヌスが罪という病の束縛から解放された長く複雑なプロセスを見ることにより、罪から救われ自由に神を求めるためのヒントを探します。

2024/09/18

「主よ…あなたはわたしたちを、ご 自分に向けてお造りになりました。 ですから、わたしたちの心は、あな たのうちに憩うまで安らぎを得るこ **とができないのです**」(アウグス ティヌス『告白』第1巻、第1章、 1)

人生において人は自分の心を満たしてくれる何かを探し求めます。 人は仕事に、ある人は娯楽に、あるる人は会に、ある人は知識に、ある人は知識にに、ある人は知識にに、がは人間愛にいるの何かを見といる。 は人間ではいいたものを手に入るします。 としますが物とにいたがあまたがににいたがいと感じ始めます。

それは聖アウグスティヌスが言うように、人は神との交わりに入るために創られたからです。それゆえ人の心は、神のうちに憩うまで安らぎを得ることができないのです。

地上のものは心を惹きつけます。それは当然のことです。全てのものか神によって創られたからです。それ

らは神の完全なる美しさ、素晴らしさをなんらかの形で反映しています。そして神は人が地上にあるものの美しさ、素晴らしさを見ることにより、それらの創造主である神の絶対的な美しさ、素晴らしさに憧れるよう望まれました。

キリスト者でなくても、人々は人間 のこの病的な症状を知っています。 例えば多くの人は、インターネット は自己の幸せへの手段に過ぎないことを知っています。しかしついい、必要以上にインターネットに時間を使ってしまいます。そして時には病的に何時間も何時間も使ってしまいます。それがむなしいことと気付きながら、それでも使ってしまいます。

このように人の心と体は罪という病に侵されています。それゆえ私たちは自己の幸せが神にしかないことを知りながら、地上のものは神とを到するがら、大切な人生の時間を出りながら、大切な人生の時間を無駄としては多くの時間を無駄遣いては多くの時間を無駄遣います。

人はどうすれば、この罪という病から解放され、救われ、もっと自由に幸せの源である神を探し求めることができるのでしょうか?さらに時に

よっては、人の病はとても深く、神を自身の幸せと認識することが困難な時さえもあります。病人がミシュラン3つ星の豪華な料理を見て、吐き気を催すように、人も罪という病に強く束縛されると、神と言う名さえも聞くのも嫌な時があります。

聖アウグスティヌス自身も、若い頃、自己の成功と欲望の追求に励み、そしてこの罪という病によるはいるまに苦しみました。この記事で放からない、自由になったの東縛れるを表していかを振り、人が罪から救われ自由にはまり、人が罪からなわれ自由にいきまず。

アウグスティヌスは告白という本のなかで、彼の20代の生活を次のように振り返ります。

「こうしてこの九年間、わたしの十 九歳から二十八歳まで、わたしたち はさまざまな欲望に、みずから欺か れ、人を迷わし、みずから欺か れ、人を迷わし、みずから欺か れ、人を欺いた。そしておおやけにか は自由学科とはばれる学問をかた。 はには宗教の名をなく、一方ではうぬばれがにはが深いがではずれにはおいる では迷信が深いがいた。 かたしたち劇場のの は、詩作の戯れ、情欲の放鏡にま も求め(た)」(11) (第4巻、第1章、 1)。

私たちもこのような生活を送ったことがあるかもしれません。欲望とれら望とれたである。それなどのである。となるである。となるである。それなどない空虚である。それでは私たちを感わしたちを惑わしたちを求きにくる。そのようなことがあるかもしれません。

アウグスティヌスの言葉を読むと次のような思いが浮かぶかもしれません。「確かに聖人でも若いとき、欲望と名誉を求めて生きた人は結構いる。しかし歴史に名を残した大聖人ですから、おそらくキリストに出るって、すぐ改心して、そしてそい会って、すぐ改心して、そしてそいか」と。

しかし、そうではありません。彼は 29歳の時、ミランの司教聖アンブロ シウスに出会い、そのおかげもあ り、徐々にカトリック信仰が真理で あることを悟り始めます。そして清 い生活を送りたいと望み始めます。 しかし彼は自分の生活をきっぱりと 改めることには躊躇します。実は彼 は19歳の頃から清い生活を送りたい という望みを持っていたと言いま す。しかし、10年以上、それを躊躇 しながら、自分をごまかしながら生 活を送ってきたと言います。

このことを聖アウグスティヌスは神 に祈りながら次のように告白しま す。

「ところが、青年時代を通して、ではその初めにあれたに貞潔をしての初めにもったの前を直にもかない。「貞歌をはいたの節ではいい。だたしったの題ではいません。といったの題ではいる。だされたして、はあいらいではないでにわたしいの色欲れではあいらいではないではないではないではないではないではないではないがあるという。(第8巻、第7)。

私たちも時に、このアウグスティヌスと同じように感じることがあるかもしれません。聖なる生活を送りたいという望みはある。謙遜で、親切で、清く、思いやりがあって、勤勉で、他者を愛することができる人間

になりたい。しかし、それを神に頼むのは勇気がいる。聖人の生活は魅力的であるが、今の生活を投げ捨てるとなると勇気がいる。罪の病から癒されたいと同時に、罪は自分を魅了する。だから思い切って、「神様、私を聖人にしてください」とは祈ることができない。

先ほどの告白はアウグスティヌスが31歳の時を思い出して書いたものです。彼は一方では清い生活、神に心が惹かれながらも、自己の病的な肉欲を断ち切るきっぱりとした意志を持つことができませんでした。彼は自分の意思の弱さ、優柔不断な態度を次のように説明します。

「手足がないか、あるいは手足が鎖に繋がれたり、衰弱して力が抜けたり、何か他の原因で妨げられたりして、しようと欲してもなすことのできないことが数多くあるが、わたしはこのような不決断に悩まされ(て

いた)」 [3] (第8巻、第8章、20)。 「このようにわたしは病み、苦しみ、いつもよりきびしくわたし自身を責めながら、完全に鎖がたちきられるまで縛られた状態のままでのたうちまわっていた」 [4] (第11章、25)。

彼の心の中で二つの意志が対立し、彼を苦しめます。しかしそのプロセスを経て、徐々に彼は自己を縛る鎖の弛みを感じます。

「鎖はもう弛みかかっていたがそれ でもわたしを縛りつけていた」 (同)

私たちも、自分の意志の弱さ、愛の 欠如、そしてその結果としての優柔 不断な態度に辟易として自分が嫌に なることがあるかもしれません。 ウグスティヌスのように手足が縛ら れていると感じ、この戦いは自分の 能力を超えていると感じる。同時に 自分で自分を責め、のたうちまわ

る。そのようなことがあるかもしれ ません。しかし、アウグスティヌス は、10年以上優柔不断な態度をとっ ていたとはいえ、彼は清い生活への 望みを捨てませんでした。そしてそ の自己の弱さと向き合う苦しいプロ セスは無駄ではありませんでした。 鎖は弛みはじめます。人は自己の弱 さと何年何十年と向き合わないとい けないことがあるかもしれません。 しかしそれは決して無駄ではないこ とを聖アウグスティヌスは教えてく れます。神に向かって歩みたいとい う望みは、例えそれが弱いもので あっても、神への愛と希望の現れだ からです。そして神への愛は、例 え、失敗の繰り返しを経験しないと いけないとしても、決して無駄にな ることはありません。

アウグスティヌスはあともう一歩で 自己を縛る鎖を断ち切るところまで 行きます。しかし、この彼の中の善 と悪の対立において、彼はあと一歩 のところで悪の方に支配されてしま います。

「わたしは心の中で『いまこそ、い まこそ』とひとりごとをいってい た。そう言いながらもう決心しかけ ていた。わたしはもう決心しかけて いたが、しかしじつは決心しなかっ たのである」。「わたしの中では、 わたしの慣れていた邪悪なものは、 わたしの慣れていなかった善良なも のよりも強くわたしを支配してい た。そしてわたしが別人になろうと する瞬間は近づけば近づくほど、ま すます大きな恐怖をわたしの胸に打 ち込んだ | ⑤(同)。

私たちも時に、自分の中での善と悪との戦いにおいて、悪の方が強いことを実感するかもしれません。それでも自分はダメなんだとあきらめてはならないことを聖アウグスティヌスは教えてくれます。アウグスティヌスもそのように感じました。しか

し、彼は自分が弱いことを知りながらもあきらめませんでした。その結果、アウグスティヌスは聖アウグスティヌスになるのです。

悪に支配されていると感じると同時 に、アウグスティヌスは清い生活を 送ることに心を惹かれます。そして それは神から与えられる恵みである ことを理解します。一方そのために は、彼自身、神に身を任せなければ ならないことも悟ります。彼は自身 の心の状態を、貞潔が女性の形で擬 人化されて彼に語りかけるという形 で表現します。貞潔は清らかで威厳 に満ちた女性として、彼の心に現れ 語りかけます。貞潔は彼を彼女のい る方に招きます。そして彼女がいる 方には、多数の男女がいます。聖ア ウグスティヌスは言います。

「かの女は、わたしに向かってほほ えみかけたが、そのやさしい微笑み によってわたしをいさめるようで あった。『あなたはここにいる男女 のすることができないのであるか。 これらの男女はそれを自分自身の力 でなし得るのであって、主である彼 らの神においてなし得るのではない のか?主であるかれらの神が、わた しをかれらに与えてくださったので ある。なぜあなたは、自立しながら しかも自立しないのか。その身をあ の方になげかけなさい。恐れてはな らない。あの方は身を引いて、あな たを倒れされることはないだろう。 安心して、あの方に身を投げ出しな さい。あなたを引き受けて、あなた を癒してくださるだろう」「65 $(27)_{0}$

このように、アウグスティヌスの心の中で、貞潔はアウグスティヌスが神に全てを委ねるよう、恐れず神に身を投げるよう勧めます。そうすれば神は彼を引き受け、彼は癒され、彼は貞潔を与えてもらうことができます。

聖なる清い生活を送ることは、人間 の力の限界を超えています。それは 神からいただく恵みです。同時に神 からその恵みをいただくためには、 人は神に身を委ねる必要がありま す。私たちはその決断がしたい、神 を信頼し、神に身を投げ出したいと 望みます。しかしそう望みながら も、私たちは自分がその決断さえも できない弱いものであると感じるこ とがあるかもしれません。しかし、 それでも私たちはあきらめてはなら ないことを聖アウグスティヌスは教 えてくれます。アウグスティヌスは 先の考察に、心を激しく揺さぶら れ、声をあげて涙します。そしてそ の涙を诵して、彼は神に救いを求め ます。

「わたしはどうであるかはわからないが、とある無花果の木の下に身を投げて、涙の溢れ出るのにまかせた。そうしてわたしの目から涙が溢れ出たが、これは『あなたに喜ばれ

る供えもの』であった。それからわ たしはこれと同じ言葉ではないが、 同じ意味のことを数多くあなたに訴 えた。『主よ、あなたはいつまでな のか。主よ、いつまでなのか。あな たはいつまで怒っているのか。わた したちの犯した古い不義のことを思 い出さないでください』。じっさ い、わたしはまだ古い不義にとらえ られていることを感じていたからで ある。それでわたしはあわれな声を 張りあげていった。『もうどれほど でしょうか。もうどれほどでしょう か。あすでしょうか。そしてあすで しょうか。なぜいまでないのです か。なぜいまがわたしの汚辱の終わ りでないのですか』。わたしはこの ように訴えて、わたしの心はひどく 苦しい悔恨のうちに泣いていたしった (12章、28-29)。

彼の涙の訴えは、神に届きます。

「するどうであろう、周りの家から、男の子か女の子かは知らない。子供の声が聞こえた。そして、子に、『取って読め、取って読め、取ってきめ、取ってきるではないた。と何をかえて、子供を歌んでのだろうかと一生懸命に考えてでのだろうなしかしそのような歌はどこで。 [8](29)。

彼は近くにある聖書を手に取り、最 初に目に触れた章を読みます。そこ には次のように書かれていました。

「宴楽と泥酔、好色と淫乱、争いと 嫉みを捨てても、主イエス・キリス トを着るがよい。肉の欲望を充たす ことに心を向けてはならない」 [9]

この節を読むと、たちまちアウグス ティヌスの心は平安の光で満たさ れ、疑惑の闇はすっかり消え失せま した。

アウグスティヌスの涙は天に届きま した。そして、アウグスティヌスは 救われました。彼は自身の涙は神に 喜ばれる供えものであったと解説し ています。私たちが自身の弱さを身 に持って感じる時、自身を神に委ね るという決心さえできないと感じる 時、私たちにできることがまだある ことを聖アウグスティヌスは教えて くれます。心の中で神への救いを求 める叫び声をあげるのです。もしか したら涙も出るかもしれません。し かしそれは、神に喜ばれる供えもの になります。そして神はその供えも のを受け入れ、私たちを救ってくれ ます。

「主よ、あなたはいつまでなのか。 主よ、いつまでなのか。あなたはい つまで怒っているのか。わたしたち の犯した古い不義のことを思い出さ ないでください」 「もうどれほどでしょうか。もうどれほどでしょうか。あすでしょうか。そしてあすでしょうか。なぜいまがわた までないのですか。なぜいまがわた しの汚辱の終わりでないのですか」

このように、苦しみと戦い、心の内の二つの意志の対立、優柔不断、神に全てを任せたいと望む心、そして、神への救いへの涙の叫びという長く複雑なプロセスを通して聖アウグスティヌスは心の底から回心したのでした。

「主よ…あなたはわたしたちを、ご 自分に向けてお造りになりました。 ですから、わたしたちの心は、あな たのうちに憩うまで安らぎを得るこ とができないのです」

- [1] 聖アウグスティヌス、服部英次郎(訳) 『告白(上)』、岩波書店、1976年、91頁。
- [2] 同、267頁。
- [3] 同、270頁。
- [4] 同、276頁。
- [5] 同、277頁。
- [6] 同、278-279頁。
- [7] 同、280。
- [8] 同、280-281。
- [9] □ マ13·13-14。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/augustinusu-ni-manabu/(2025/12/16)